

[音 楽]

地域と共に育てる和楽器指導の充実を目指して

- 関心・意欲を引き出し、技能を身に付ける篠笛指導の在り方について -

白井 愛*

1 はじめに

音楽科では、「和楽器については、3学年間を通じて1種類以上の楽器を用いること」¹⁾「和楽器を用いるに当たっては、常に学校や生徒の実態に応じるとともに、可能な限り、郷土の伝統音楽や伝統芸能を取り入れることが肝要である。」²⁾が学習指導要領でうたわれている。

本校では数年前から、篠笛を音楽の授業で取り入れている。日本の伝統楽器に触れるとともに、この地域の伝統芸能である「大の阪」に使用される篠笛に親しむためである。篠笛の購入については、指導目的などを明記した文書を入学時に保護者に出し、アルトリコーダーと共に購入してもらうような方法をとっている。また、数年間指導を進めているため、兄弟姉妹や知人等の物も使用するなどしている。篠笛はプラスチック製で手入れも簡単なものを学校で一括して注文している。生徒たちは、小学校の時に「大の阪」を運動会で踊ったことがあり、その際演奏で使用された篠笛を見たり、音を聴いたりした経験がある。また祭りなどの行事で実際に篠笛を吹いたことがある生徒もおり、中学校の授業で使用する前から篠笛を知っていたという生徒は約7割にのぼる。そのためか最初から篠笛に対しては親しみを持っている。アンケートでは、授業で篠笛を吹く前の気持ちとして「とても楽しみ・吹いてみたい」あるいは「少し楽しみ・どちらかという吹いてみたい」と答えた生徒は79%に達した。しかし、授業後のアンケートをとった結果(本研究の前年度)、実際手にしてみるとなかなか音が出ずに苦戦し「簡単だと思っていたが難しかった」「思っていた通り、難しかった」と答えた生徒は73%にまで及び、前述のアンケートで「楽しみにしている」と答えた生徒とはほぼ同数、という結果であった。新しい楽器を手にした時、たとえどんな音色であろうと、初めて音が出た時には感動を覚えるものである。そしてその感動は「楽しい」「もっといろんな音を出してみたい」という意欲につながると考える。音が出なくて苦戦すれば、その分音が出た時の感動は大きいですが、その『苦戦時間』があまりに長く毎時間にも及んでくると、苦手意識だけが強くなり、しまいには楽器嫌いになり、音楽の時間を憂鬱に思う生徒を生み出すことになってしまう。逆に、小学校の頃から地域の祭りなどで篠笛を演奏しており、演奏技術が十分ある生徒は、音楽の授業ではその実力を発揮する機会がなく、時間を持て余してしまうというのが現実である。

実際に、篠笛を自分の思うように音を出すようになるのは、音楽の時間だけでは正直難しいといえよう。しかし、できないことができるようになるために挑戦し、根気よく取り組み、その結果できるようになった時の喜びを実感していくことが「楽しさ-自己実現-」であることを学んでほしい。「篠笛を上手に吹く」ことを目的とするのではなく、古くからある、地域の伝統芸能に深く関わる「篠笛」を楽しむ気持ちを大事にしなが、音楽を愛好する心を育てたい。

2 研究の目的と方法

本研究は、授業における生徒の観察及びアンケートによる感想から、生徒の実態を見取る。その後、時間配分に配慮したりグループ活動や他の取組を取り入れたりしながら、「初めて手にする篠笛の楽しさ」を味わうための有効な手立てを探っていく。また、本校の所在する地域には伝統芸能である「大の阪」を継承している「大の阪保存会」がある。そのような地域の方々とのつながりをもつことで、音楽を通して郷土芸能に親しむ態度を育てたい。

3 実践の構想と概要

(1) 篠笛に手慣れるために

「初めてだから」「難しそうだから」という理由で、最初は丁寧に、時間をかけて練習したいと思うのは何も音楽

*魚沼市立堀之内中学校

(5) 地域との連携

地域の方々の前で演奏することを通して目標を持たせ、意欲を引き出し、より高い技能の習得につなげる。本校では毎年9月の体育祭で地域の伝統芸能「大の阪」を披露している。演奏は地域の「大の阪保存会」の方々と、小学校の頃から運動会や夏の盆踊りで篠笛を演奏したことのある生徒たちで、5月頃より講習会という形をとり、保存会の方々からご指導いただいて練習を行ってきた。生徒たちの意欲付けと地域の方々との絆づくりに向け、今までは経験者が対象であったこの講習会に、音楽の授業で篠笛の演奏技能を伸ばした生徒たちにも参加させ、全校の前での演奏の機会を与え、講習会への参加を考えた。

(6) 学習計画について

学習計画は全80分である。なお、授業時間1校時の中では前述のように篠笛の指導に基本的に10分間を当てた。なお、発表活動のみ15分から20分の時間を割いた。

次	学 習 活 動
1次 (10分-2回)	○篠笛について知ろう ・篠笛の歴史、構造、種類など楽器についての基礎知識を知る。 ・篠笛の基本的な構えや姿勢について知り、吹いてみる。
2次 (10分-1回) (15分-1回)	○チャルメラを吹こう ・姿勢をチェックしながら篠笛を吹く。 ・「チャルメラ」のメロディ練習・発表。
3次 (10分-2回) (15分-1回)	○お囃子合戦をしよう ・グループごとに、祭りで使われる囃子を作る。 ・グループごとに発表し感想を述べる。

4 実践の実際

(1) 篠笛に手慣れるために ～10分間で、ポイントを押さえた指導～

① 自分で探る

授業の初め10分で篠笛の学習をすると習慣付けたことで、授業が始まる前に篠笛をケースから出して吹いている生徒が増えた。初め「まずはとにかくどんな方法でもよいから音を出してみよう。」とは吹き方のポイントについて何も触れず、指示を出した。生徒たちは口をすぼめたり篠笛を傾けたりしながら試行錯誤で音を出そうとした。音が出なくて苦戦している生徒の中には、練習を始めて数分で篠笛を机に置いてしまう生徒もいた。そこで、篠笛を吹く時のポイントとして、次のような基礎的な事項を3つ挙げた。

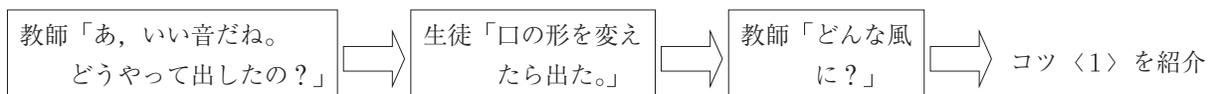
【音を出すコツ】

- <1> 口は突き出すのではなく左右にひく。
- <2> 篠笛は斜めに傾けず、水平にもつ。
- <3> 息を吹き込み、篠笛を回転させながら音がよく鳴る角度を探す。

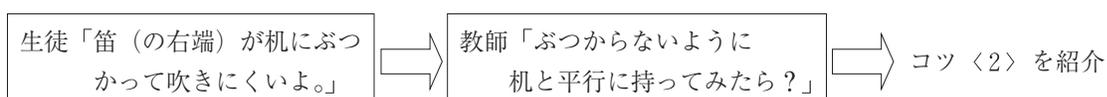
② コツは小出しに

上記の3つのポイントは一気に教えるのではなく、生徒の状況からの教師の言葉がけとそれに対する生徒の反応、という互いのやりとりを大切にしながら気づかせるようにした。例えば

<1> 音がよく出ている生徒へ



<2> 生徒のつぶやきから



〈3〉 生徒からのコツの紹介なし

教師「空瓶に口を当てて、瓶を動かしながら音がよくなる場所を探すように、必ずよくなる角度があるから篠笛を少しずつ動かしてなる場所を探してみよう」

⇒ 教師からの助言で
コツ〈3〉を紹介

これら3つのポイントを小出しにすることによって、生徒たちは練習する意欲を持続させていった。篠笛を置いた生徒もポイントを教える度にまた楽器を手に取り、音出しに挑戦していた。また10分という手頃な時間配分により、3時間目あたりからは、篠笛を途中で手放す生徒はほとんど見られなくなった。

(2) 早めの「指打ち」指導について

初めは、初心者でも音の出やすい、全開（何もふさがいない状態）の音の練習から行った。音出しに慣れてきた時点で「指打ち」を指導すると、生徒たちは楽しそうに何度も「指打ち」をしていた。一つの音で「指打ち」ができると、「他の音でやってみるとどうなるんだろう」「連続してやると楽しい」などの声が聞かれ、生徒たちは競うように篠笛を吹いていた。あまり音が出ず悩んでいた生徒も、「指打ち」を練習しているうちに音が大きく出るようになった。

(3) グループによる活動

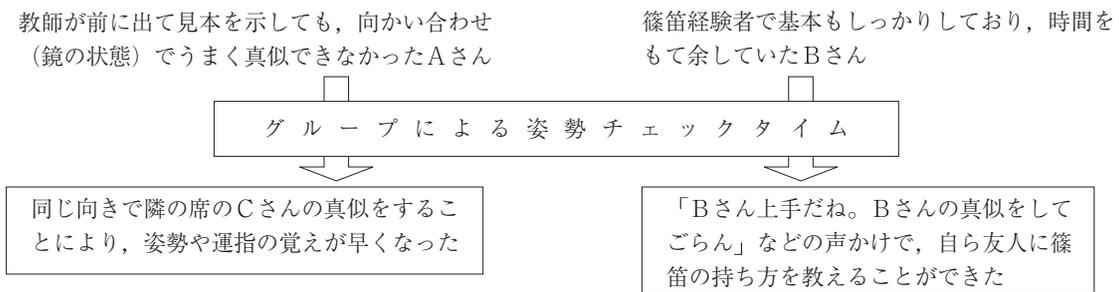
① 姿勢チェックタイム

ア よりよい音づくりに向けての意欲の向上

4人で1グループとし「チェックタイム」を採用した結果、生徒はお互いの姿勢をチェックするだけでなく、よい音が出る生徒の姿勢を真似しようとする光景がほとんどの班でみられた。チェックポイントは4(1)に記す「音を出すコツ」の一部も採用したため、「自分の意見がチェックポイントになった」と嬉しそうに語る生徒の姿が見られた。

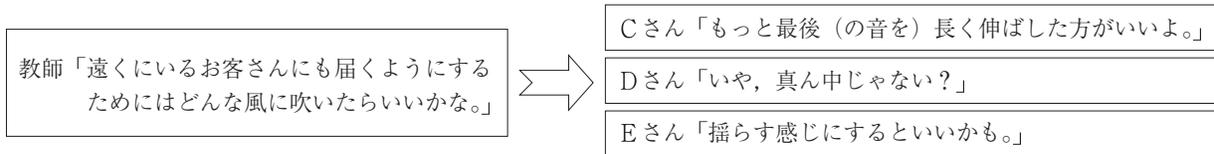
イ 互いに教え合い学び合う場の醸成

グループでのチェック活動により、教師が前に出て模範の姿勢を見せたり、教科書の姿勢を真似させたりする指導に比べて、次のような生徒の変容があった。



② チャルメラ合戦

運指が容易で楽譜も必要としない、誰でも知っている「チャルメラ」の音楽を使つての指導を試みた。グループを一つの「屋台」とし、一人でも多くの人を集められる「チャルメラ」のメロディを奏でよう、という取組である。教師はグループ練習をまわり、次のような発問をした。



これらは、音楽的な表現を追求する内容の発言であり、以前は聞かれなかった言葉である。篠笛は強く息を吹き込んだところで、大きな音を鳴らすことはできない。よって生徒たちは「人を集める音」を「大きな音」と捉えるのではなく、「長く伸ばす音」あるいは「響く音」と考え、ただ「吹く」だけでなく「自分たちの出したい音」を見つけ、楽しみながら篠笛を吹いていた。各屋台の発表の後、「ラーメン一杯！」などと声をかける生徒もあり、生徒の心を引きつけた。

③ お囃子合戦

(2)で述べた「指打ち」の指導の後、グループによる「お囃子合戦」を行った。1グループ30秒程度ではあるが、祭

りの雰囲気になじむ曲を考え篠笛と太鼓で即興で演奏し発表した。「お祭りらしい雰囲気が出る」と「指打ち」を取り入れる班も多かった。オリジナルの曲作りであるので、長く音が続かない生徒は短い音を担当するなど、篠笛を苦手とする生徒に、子供たちも自ら工夫し、音づくりに配慮していた。

(4) 運指について

アルトリコーダーの運指の基礎を押さえてから指導を行ったことが早い理解に結び付いた。教師の運指を真似するよりも「アルトリコーダーの『レ』だよ。」という説明の方が理解が早かった。また、左利きの生徒で「教科書やみんなと逆に持ちたい」という生徒がいた。左利きの人が笛を左に構えるのは「逆持ち」といって良くない、という説もあるが、これについては認めることとした。そもそも篠笛は祭りや芝居の舞台などで、独特の楽器として親しまれてきたものであるにも関わらず、きちんとした独習書が見つかっていない。それは篠笛そのものが不完全であり、各地方によってそれぞれ造りや音律が統一されていなかったためである。昔から篠笛の演奏法は口伝えや見様見まねで修得されてきたのである。よって、吹き手によっては師匠と真向かいに座り、鏡のように笛を構えることもあったため、右・左の正式な規定はない、と話す篠笛演奏家もいる。その生徒は「逆持ち」によって教師と鏡のような持ち方となり、運指も姿勢も模倣しやすいため比較的早い段階で音の出し方、運指を覚えることができた。

(5) 大の阪講習会について

授業では、どうしても音の出ない生徒中心に進めてしまうが、興味のある生徒は地域の「大の阪保存会」の方々が指導してくださる講習会（写真①）に参加するよう呼びかけた。本実践前は小学校からの篠笛経験者のみが参加していたが、先に述べた(1)～(4)の実践後、次のような試みを行った。

- ①経験を問わず、中学校の音楽の授業で初めて篠笛を吹いた生徒にも積極的に声をかける。
- ②講習会では生徒が持っているプラスチック製の篠笛ではなく、竹製の篠笛を貸し出す。（意欲を高める効果）
- ③生徒だけでなく保護者の参加も受け付ける。（授業から地域、家族ぐるみの活動）

実際、中学入学後初めて篠笛を手にした生徒からも参加希望があった。保存会の方々も、「地域の伝統芸能に興味をもつ子が少しでも増えるなら。」と歓迎してくださった。また講習会が始まって以来初めて保護者からも「大の阪講習会に参加したい」との声があった。人前であまり篠笛は演奏したことがないという方であったが、実際に来ていただいたところ、経験豊富な生徒が保護者に篠笛の吹き方を教える、という姿が見られた。講習会受講生徒は体育祭で全校の前で演奏を披露し、練習の成果を立派に発揮していた。

【大の阪講習会 参加生徒の声】

○初めて講習会に参加したFさん
「授業では10分くらいしか篠笛をやらないのでたくさん教えてもらってよかった」

○経験者で、保護者に吹き方を教えたGさん
「大人の人に教えるのは恥ずかしかったけど、自分が吹くだけじゃなくて人に教えてあげることができてよかった。」



写真①「大の阪講習会」の練習風景

5 結果と考察

教師の観察や生徒の姿や感想をもとに、本実践を振り返ってみた。

(1) グループ活動を通して

音が出ず、今までは個人練習で一人で悩んでいた生徒も、グループ活動を取り入れることによって他の生徒を手本にしながらかつつかもうとする姿が見られた。また、以下に述べるHさんの感想などから、音が出るようになった時の喜びは、個人練習を行ったよりも大きな喜びへとつながり、次時への意欲付けもできたと考える。

【Hさんの感想】

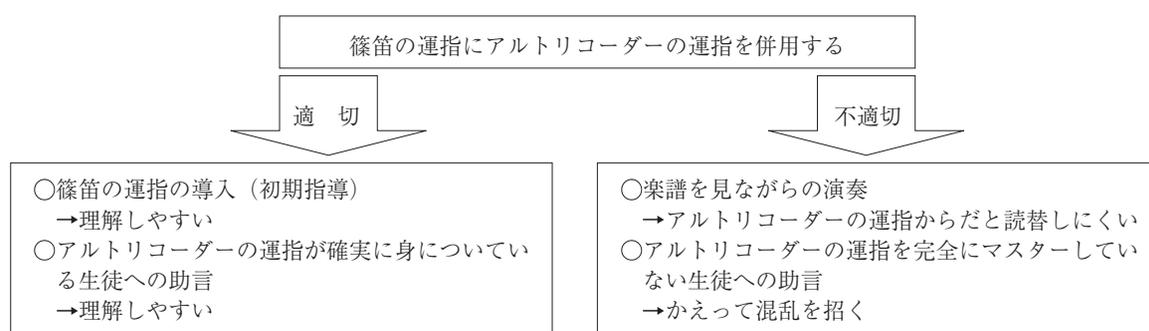
初めて音が出た時、班のみんなが「やった！」と言ってくれたので嬉しかった。

「チャルメラ合戦」や「お囃子合戦」を通して、生徒は「友達の音を聴く」という活動を行った。器楽アンサンブルや合唱活動で行われている「聴き合う」という通常の活動が篠笛を通して行うことができた。ただし、人数の関

係上、全ての班に必ずしも篠笛経験者がいるというわけではなかった。そのような班では、音の出るようになった生徒が練習をリードしている光景がみられたが、そのような生徒がいない班はゆきづまり、やはり教師の援助を必要とした。

(2) 運指について

運指の指導を始めて2～3時間目はスムーズであったが、慣れてくると逆にアルトリコーダーの運指を用いることが不自然になってきた。



上記のように、奏法指導初期の段階でアルトリコーダーの運指を用いることは場面によっては有効であることがわかった。しかし、いくら大よそが似ていたとしても、やはりアルトリコーダーと篠笛は異なる楽器である。ある程度慣れたところからは和楽器特有の世界に入り込んでいかねばならない。例えば、実物の篠笛を何種類か見せたり、篠笛と尺八、あるいは篠笛と太鼓の演奏の映像を鑑賞させたりするなどして、日本の笛にじっくりなじませ、その音色に近づいていきたいという意欲をもたせることが重要であると感じた。従って、今後引き続き具体的に曲を演奏するなど指導を続けていく際には、運指の併用は不適切であると感じた。より効果的な運指の指導法については今後最大の課題である。

(3) まとめ

演奏経験のある楽器と、全く未経験の楽器では生徒の興味・関心が異なり、それに伴って奏法指導の導入の切り口も変わってくる。新しい楽器ほど、その展開方法と技能の身に付き方によって生徒たちの目の輝きも異なってくるのが分かった。従来からの指導方法を振り返り、今年度試みた本実践を通して、演奏技術の身に付け方にも、短時間ずつの繰り返し指導、お囃子を用いての指導、運指法など様々な指導法が考えられ、またその方法により生徒の反応も変わってくるのが分かった。

地域と一体化した中で地域の方々が生徒に伝統芸能を伝えていくことは、生徒が生涯を通して音楽を学んでいこうという意識につながっていったことを実感した。「大の阪」演奏については、微妙な抑揚が難しいため、まだ全員が習得するには至っていないが、今後楽譜の内容を工夫して全員が演奏可能になるように考えていきたい。

昨年度の実践を振り返り、生徒の集中度や生徒の心を捉えた取組により、今年度は全80分の授業後のアンケートで、67%の生徒が「篠笛を吹いてみて楽しかった」と答え、実践前の27%の数字を大幅に上回った。新しい楽器を目の前にした時、生徒たちは「どんな音がするのかな。」「自分も鳴らしてみたい」という、「期待」とも言っていような気持ちを抱く。それは、音楽が好き・嫌いに関わらず全ての生徒に共通して見られるものである。篠笛を手にする前の、「楽しみだ・吹いてみたい」をいう気持ちを大切に、吹けるようになったという技能面での自信をもたせていきたい。様々な音が奏でられる、創り出せるという真の喜びをもたせるよう今後も指導の工夫を試みていきたい。

〈引用文献〉

- 1) 文部省 『中学校学習指導要領解説 音楽編』 p.70, 1999年
- 2) 文部省 『中学校学習指導要領解説 音楽編』 p.71, 1999年

〈参考文献〉

- 石高琴風編著 「しの笛の吹き方」(有) ケー・エム・ピー, 2004年
- 尾原昭夫編著 「やさしくたのしい篠笛の吹き方と日本の名曲」-初級編- 株式会社オンキョウパブリッシュ, 2001年